レッドリボン 30 周年

Think Together Again

最初にアーティストが動いた

1991 年の春、ニューヨークのイーストビレッジで、Visual AIDS（ビジュアル・エイズ）というグループのアーティストたちが、小さな会合を開きました。エイズで亡くなった人を偲び、厳しい病と闘う人やケアに当たる人への励ましと思いやりの気持ちを示すシンボルを作るための会合です。

ニューヨークの舞台関係者やアーティストの間でも当時、多数の人がエイズで亡くなっています。次は自分がエイズの原因となる HIV（ヒト免疫不全ウイルス）に感染するのではないか。そんな恐怖や不安も広がっていました。このことが逆に、HIV に感染している人を遠ざけ、話題にすることすら避けるような社会的雰囲気を生み出してもいました。

現在の社会の雰囲気と少し似ています。その中で、HIV/ エイズについて人びとが話をできるようになるきっかけとして、簡単に作れて誰もが身に着けられるシンボルが必要なのではないか。アーティストたちはそう考えたのです。

なぜレッドなのか

ニューヨーク郊外の住宅街ではそのころ、湾岸戦争の米軍兵士の無事帰還を願う黄色いリボンが庭先の樹木などに結び付けられていました。その黄色いリボンが最初のヒントでしたが、アーティストたちは樹木ではなく、衣服の襟や胸に着けるリボンにすることを選びました。リボンの色は、いくつかの候補がありましたが、最終的に赤になりました。

Visual AIDS公式サイト『レッドリボン･プロジェクト』のページには、赤は『血液とのつながりを連想させる一方で、情熱を示してもいます。怒りだけでなく愛も含めた情熱です』と書かれています。

HIV は血液が主要感染経路の一つなので、赤にはどこかまがまがしいイメージも付きまとうのですが、それを超えた『情熱』がメッセージに託されました。

初期のレッドリボンの作り方は『赤いリボンを 6インチ（約15センチ）の長さにカットして逆 V 字型に折りたたみ、安全ピンで衣類に着ける』と説明されています。プロジェクトがスタートすると、「Ribbon Bee（リボンビー）」と呼ばれる小さな会合があちらこちらで開かれるようになりました。みんなでレッドリボンを作るための集まりです。